

2 章 Please Take A Seat! どうぞ座って

／ 玄関先のベンチ

1 - 1 Bloemgracht, Amsterdam のケース

1 - 2 メッセージボード

1 - 3 尾道坂の町の事例



パタン・ランゲージ PL_242 FRONT DOOR BENCH では、玄関先の公私の分かれ目の私的部分にベンチが置かれているケースが描かれている。もちろん家族用であるが、ここで取り上げるのは、通行人に座ってもらってもよいとの申し出が、プラカードで明示されたケースである。

公園のベンチもよいが、腰痛者にはもっと身近にベンチが欲しい。それをアムステルダムの小運河の街、ブルーム通り Bloemgracht で見つけた。Gracht には運河と通りの両義があるとか。表通りつまり表運河は、階段型オランダ破風の商館が立ち並ぶ、世界遺産にも登録された観光スポットであり、遊覧船で一望できる。しかし写真やスケッチを楽しむならこちらが上、間口 6 m (3 間) のうなぎの寝床型町屋が隙間なく建ち並んでいる。間口巾には階段破風が立ちあがるゆとりはなく、それに代わる仁丹の看板風の提督帽型パラペットが、アイデンティティを競っている。

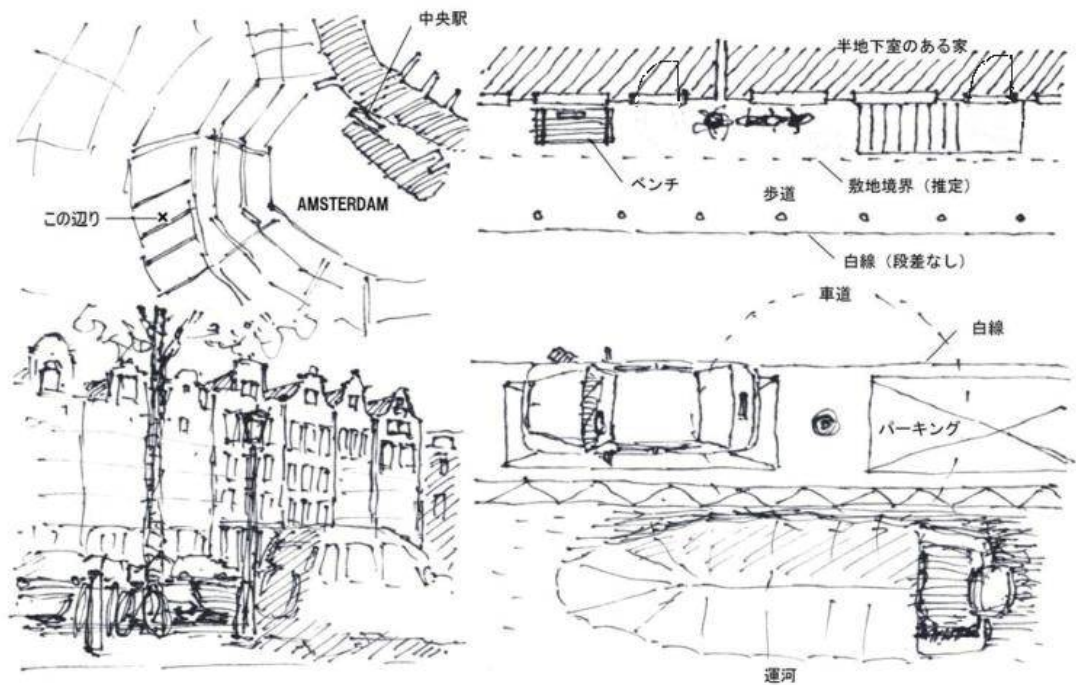
1-1 Bloemgracht, Amsterdam のケース



ベンチが置かれている運河岸道路のスケッチを、次ページに掲げる。運河の幅は 20m 程度、馬車の通行を前提に作られた道路なので、今日も一方通行道路としては支障がなく、2m の歩道、2m の車道、そして駐車場兼用の河岸緑地 (字句通りの parking) がうまく棲み分けている。念のために付け加えると、写真が楽しめるという言い方には少し嘘がある。観光シーズンの夏期は街路樹が茂っていて見通しがきわめて悪い。だから上図は、多くの写真を総合して描いた労作なのである。通りを全部見通したい一との一念から、筆者はブルーム通り 400m の片側全景を描き起こしている。



ところで問題は、ベンチが置け、駐輪でき、緑化が楽しめる立派な歩道の出所である。高低差がなく舗装も一体になされているので見過ごすが、実は半分は住宅の地所なのである。その根拠は、頭上を見上げると見つかる。どの建物にも必ず、引越し用の滑車フックがついた、長さ 1m 程のツノが生えている。だから壁から 1m ほどは、日本の住宅でいえば底の下なのである。半地下階をもつ住宅では、このスペースに階段を設けている。オランダの建物には、雨に備える気苦労がなく、庇を設けない。長崎のハウステンボスでは、雨の日は店内の床がビショビショに濡れて大変だと聞く。



1-2 メッセージボード

さて、このような場所でベンチを見つけた場合、歩行者はどういう行動をとればよいのであろうか。快適さを絵に描いたようなベンチが「座れ」という＜アフォーダンス＞を発信しているが、しかしベンチは私物らしいので、持ち主が見当たらないと了解



が得られない。筆者の場合も、座りたいけど座れないジレンマを感じつつ歩いていた折に、” Please Take A Seat ! ”とのサインボードが添えられたベンチを発見した。ほのめかすだけでなく、言葉で明示していただいたわけ。アムステルダムでの最初の朝、彼我の距離が一気に縮まった感じがしたことはいうまでもない。

個人と公共の境界領域で何が起きているか、何か空間的収穫があるかよく観察してみよう—というのが「都市のインテリア」編集のねらいである。その場合、公共の場所を市民の活動のために公開するケース（公開型）が一般的であり、道路端や河岸緑地を近隣住民が花壇として利用する例などがよく事例として挙げられる。近隣商店街の道路を、通過交通を抑制するために歩道舗装化した例などは、地域選出市会議員の面目躍如といったところである。リーダーの顔が見えない歩行者天国などは、よほど人物が練れた市民のみが成しうる快挙であるといえよう。

しかしそれとは間逆の私的権利の譲歩例（開放型か）は、人間活動の質的な比較として公開型より尊い。これがたまたまではなく線的面的に行われているとすれば、それこそ大事件である。先ほどのベンチに座ってしばし憩うと、絵のように美しい切妻屋並の、その絵の一部になったような気がした。

ところで、美しい話には裏がある—とよく言うが、写真に撮った先ほどのサインボードを後でよく読むと、小さく書いた but …の後に「窓のへやには赤ん坊が寝ているのでクサは吸わないで—」と続いていた。オランダでは大麻の購入はおとがめなしとのことであるが、「うちのベンチでそれを用いるのはお断り」との宣言が、この親切なサインボードの主意であったらしい。

さびついた放置自転車と共に、美しい街並みの悩みを垣間見た気がした。

1-3 尾道坂の町の事例



尾道の港を望む、古寺古民家が蝟集する坂の町では、坂道の散策で疲れた観光客への私的サービスとして、民家の軒下にさりげなく古椅子を置くルールがある。坂下の商店街には、個人が道の真ん中に〈サロン〉を開設した事例がみられた。街路の合流点（K.リンチの言うノード・結節点を思わせる）の近く、無意味に広がった道の真ん中に、手前側の古道具屋が売り物のソファを置いて通行人の憩いの場を提供している。川の分岐点に中州ができるように、そこは意外と人もクルマも通らないことが確かめられているのであろうか、〈サロン〉はほぼ常設化している。

戦災を逃れた尾道では、引き返すことが困難なほどに細街路に依存した住宅化が進んでおり、法的にスタンダードな都市整備は不可能に近い。代わって出てきたのがDIY型街づくりである。タイムスリップ感覚を味わうために若い観光客が多数訪れ、住民は人々をもてなすために、智慧を絞り体を使って働いている。そしてここが肝心なところ、普通なら住民も高齢化して・・・と続くところであるが、尾道でDIY型街づくりを実践している住民には元観光客が居ついた新住民が多く含まれ、平均年齢が若い。街を映画のセットのように見立てて新しい被写体に再生する感覚—これが尾道型の〈都市のインテリア化〉手法なのである。

C.アレクザンダー「パタン・ランゲージ」から



PL_242 玄関先のベンチ FRONT DOOR BENCH が該当する。ベンチはデザインよりも置き場所が肝心—と諭す 241 座る場所 SEAT SPOTS の最適解である。人は（とりわけ年寄り）道を眺めるのが好きであるが、公的な道にずっと座っているのは落ち着かない。そこで公的な場と私的な場の間には段階設定が必要になる。私物のベンチを公私の境に置くと、誰にも分る安定的な半私的領域が形成される。公共側からみればベンチの寄付を受けたようなもの（但し座るときはあいさつが要る）、民間活力の活用はまずベンチから—。